

雑草という名の植物はない

春は生命の躍動を身近に感じる季節です。木々の芽吹きや咲き乱れる花などに囲まれると、眩いばかりの命の輝きに圧倒されます。その一方で「雑草」もぐんぐん勢いを増してきます。お天気の良い日には、自宅の庭や公民館の花壇で草取りに没頭するのですが、一週間もするとまた生えてきてイタチこっことが続きます。

雑草の驚異的な生命力と格闘していると、時折「はっ」としてその手を止めることがあります。可愛らしい花を付けた草に出会った時です。米粒ほどの小さな花ですが黄色や紫色の鮮やかな色彩で、精いっぱい自己主張をしているように思えます。彼らも花を咲かせ種を稔らせ、命を繋ぐ営みに余念がないのです。

邪魔だからといって、彼らの崇高な営みを無残に断ち切

るのは、人間の傲慢さじゃないのかと、一瞬躊躇するので。しかし、そう思いながらも結局は引っこ抜いてしまうのですが、心にシミのようなわだかまりが残ります。

「雑草という名の植物はない」昭和天皇のお言葉(牧野富太郎博士の言葉とも)として広く知られています。雑草と一括りにされる草花にもそれぞれ名前がある。そして懸命に生きている……。とても含蓄のある言葉です。

ヒトは食事の際「(命を)いただきます」と感謝の念を表しますが、雑草を引き抜く場合も、「ごめんね」と眩いてもいいかもしれませぬ。